

——60年余りの写真家人生を振り返り、今思うことは

写真を始めた昭和25年ごろの暮らしは、今ほど豊かなものではありませんでしたが、どこに行っても子どもたちがいて、地域の温もりを感じました。貧しくも力強く生きる人々、けなげに遊ぶ子どもたち…。そんな地域の営みや人間の深みある表情に魅力を感じ、60年余り人物写真を撮り続けてきました。

人々の暮らしは時代とともに変遷し、今ではカメラを向けると不審者扱いされることもありすが、いじらしさ、かわいらしさ、いやらしさ、かなしさといった人の生きる姿を撮るのがやっぱりいいですね。

——俳句との競演にも取り組まれているとお聞きしていますが

写真と俳句の競演を始めたのは6年ほど前。私は句を詠みませんが、所属する日本リアリズム写真集団では頻繁に行われています。大高さんも言われていますが、写真家でありながら俳句で名を馳

せた人もいるぐらい写真と俳句は密接な関係にあります。その関係はとても微妙で、不即不離の程よい距離感を保つことが大切です。

一見、何の関係がないように思えても、その根底に流れるものが同じであれば、俳句に込められた思いを写真が浮かび上がらせたり、写真が俳句が引き立てたりと、相乗効果を楽しむことができます。

——写真の活用方法について、アイデアはありますか

阿南の魅力が写し出された数々の作品は、貴重な財産として将来に引き継がれ、さらには、この事業をきっかけに、伝統文化や観光との組み合わせによる新たな事業の展開に結び付けていくことができると思います。俳句とのコラボレーションもその一つです。

「百聞は一見に如かず」といいますが、写真の持つ力を最大限に活用したいものです。私としては、どこにでも持っていきけるような小冊子を作って、阿南市のPRに役立てられたらと考えています。

——応募作品に寄せる期待を聞かせください

阿南風景百選は、単に写真の技術を競うものではなく、写真を通してまちの再発見やふるさとを再認識することに主眼をおいています。従来の観光PRに使われてきた絶景写真だけでなく、暮らしの中に息づく温もりやきずなが感じられるような写真もあっていいと思います。いいなと思う写真が撮れたら、それが携帯写真でも構わないので、ぜひ応募してください。少なくとも1000点は集めたいと思っています。

また、今回の事業は、阿南の魅力に触れていただく絶好の機会でもあります。市外の方にも積極的に参加していただきたいと考えています。私も県内の塾生たちにはらしを配布して参加を呼び掛けているところ。時々、「どこを撮ったらええ」とか「この写真をみてくれへんで」とか聞かれますが、さすがに応じていません。見たら先入観を持ってしまおうのでね。(笑)

「阿南風景百選」審査員にインタビュー

応募作品に寄せる期待

少なくとも1000点は集めたい。今の自分を見つめ直すきっかけに。阿南風景百選の審査員のお二人から、応募作品に寄せる温かいメッセージをいただきました。季節は夏、そして秋、冬へと…。引き続き、阿南風景百選の作品を募集しています。

——ふるさと阿南といえほどのような風景を思い出しますか

——ふるさと阿南といえほどのような風景を思い出しますか

東京や外国で出会った人たちに、「太陽を浴びて育ったんでしょうね。阿南はいいところなんですよ。」と言われ、嬉しく思ったことがあります。阿南のすばらしい自然に育まれたことに感謝しなくなりました。

東京や外国で出会った人たちに、「太陽を浴びて育ったんでしょうね。阿南はいいところなんですよ。」と言われ、嬉しく思ったことがあります。阿南のすばらしい自然に育まれたことに感謝しなくなりました。

——俳句と写真、どこか共通点はありませんか

写真と俳句は、「瞬間を切り取る

る」一点で似ているといわれています。対して、短歌と映像の視点が似ているといわれています。写真と俳句は、一定の枠の中で、いかに自分の感じたことを伝えるかが魅力ですね。

——つまり、見る人の感性が写真や俳句に表れるのですか

知っているはずの風景なのに、句を詠むことで新たなものに出会える、そんな期待があります。同じ風景でも、詠む人の年齢や性格、その人が置かれている状況などで句も変わってきます。あるがままを詠んでも、その時の心が投影されるのが、俳句の面白さです。

——写真の活用方法について、何かアイデアはありますか

写真を見た方々から俳句を募集し、「写真俳句」としての作品もできそうです。阿南の魅力を伝えるポスターもできそうです。応募作品をホームページで紹介するなど、阿南市内外の方たちに広く見ていただけるような機会があれ

ば、参加される方々にやりがいを感じていただけるのではないのでしょうか。プロのカメラマンの方が、愛好者の方たちにアドバイスをする撮影会などいいかもしれませんね。

——応募作品に寄せる期待を聞かせください

俳句も同じなのですが、写真を撮ること、今の自分を見つめ直すことができるような気がします。身の回りの風景を何気なく撮り取られるんですね。阿南のすばらしい自然と出会った感動が、一枚の写真から伝わってくるのを楽しみにしています。そして、俳句もぜひ阿南で詠んでいただきたいですね！

(聞き手…東京事務所長 鈴江)



作品募集

四季の風景を題材にした次の4部門で写真を受け付けます。入選者には賞状と賞金が贈られます。

- 春の風景 ●夏の風景
- 秋の風景 ●冬の風景

撮影期間 平成24年4月1日～平成25年3月31日

応募期間 平成25年4月1日～19日

応募点数 1人1部門3点以内

※くわしくは、阿南市ホームページをご覧ください。問い合わせは、商工観光労政課

問い合わせは 商工観光労政課 (☎22-3290)へ

写真は心の投影 一期一会の感動を伝えて

俳人 大高 翔さん

本名:水井紘子(旧姓:谷中)・阿南市出身、東京都中央区在住。35歳。昭和52年7月13日、阿南市に生まれ、中野島小学校卒業まで阿南市にて育つ。俳人である母・谷中隆子(藍花俳句会主宰)のすすめで13歳から俳句を始める。ペンネームを大高 翔とし、執筆活動を中心に講演やテレビ出演、校歌作詞などで幅広く活動。海外でも、日本語や日本文化の魅力伝える活動を開催。平成22年度には徳島県阿波文化創造賞を受賞。

技術を競わず 阿南の魅力を再発見したい

写真家 木田英之さん

阿南市宝田町在住。78歳。16歳から写真を始める。20歳の時に二科展写真部門で県内から初入選を果たす。平成12年刊行の写真集「黒白のメッセージ」で県出版文化賞を受賞。平成22年の全国公募写真展「第35回視点」(日本リアリズムグループなど主催)では、カラー6枚組の作品「終の住処」で第2席にあたる奨励賞に、「第36回視点」では、カラー8枚組の作品「茫茫」で第3席に当たる優秀賞を受賞。現在、日本リアリズム写真集徳島支部長、阿南市美術協会写真部長を務める。

